

どんな生き方をしたいか、どんな人生を歩みたいかを考えていない教員が、児童生徒にこのことを聞いてはいけない。ところが、意外とこのことを真剣に考えている教員は少ないのではなかろうか。夜の会合などで、「〇〇先生は、どんな生き方をしたいんですか」とか「あなたは、どんな人生を歩みたいと考えているんですか」という話には、なかなかならないだろう。教員たる者、目先のことだけでなく、もっと遠くを見つめていたいものである。

私は、自分が不惑の40歳を迎えたときに、さすがにちょっと考えた。人生80年として、ちょうど折り返し地点だと思った途端に、怖くなってきたのである。あの“おそれ”ともいうべきものは忘れられない。今までは、簡単に言えば、何も考えずに前へ前へと進むだけでよかった。

それが、折り返して戻るとなったときに、見える景色も考えも変わってきたのである。これからの人生は、どんどん残り少なくなるばかりである。自分は何も知らない。何も語れない。「このままでいいのか」と考えた。すると、生き方とか人生について考えるようになったのである。

40歳になるまでは、男40になれば、今までよりも楽になるのではないかと、淡い期待を抱いていた。これは、大きな間違いであった。40からのほうが苦しい。量的にではなく質的に、精神的にである。それでも嫌ではなかった。これが生きるということだと自分なりに理解していたからである。

「人生苦あれば楽あり」というが、「人生苦あれば、また苦あり」である。辛いこともたくさんある。逃げ出したいと思うこともある。それでも前に進む。それが生きるということである。それが人生である。生きがい、やりがいの問題でもある。

私は、自分が教員に向いているとは思わない。そう思ったこともない。向いていない自分が教員をやっているからこそ、それなりに努力をしてきたのかもしれない。では、自分が何に向いているか。占いの類いを見ると、いろいろと出てくる。残念ながら、そこには“教師”という文字はない。だからといって、様々な職業を試す勇気もなかった。それでもあがきたくなくて、小学校にいたり、中学校にいたり、海外にいたりしているのかもしれない。そして、ついには高校にきてしまった。一つの所にとどまる不安から逃げたかったのだろう。

素晴らしい人生を送るには、まずは人生について考えなければならない。考えるためには、知識も必要である。何もないところから考えろと言われてもむずかしい。この場合の知識は、人や本から得ることが多いだろう。多少無理があるかもしれないが、今の教育で言うと、知識及び技能と思考力・判断力・表現力等が車の両輪となり、学びに向かう力、人間性として前に進むのと似ているかもしれない。

自分の生き方や人生について、いつも真剣に考えている先生と出会った子どもたちがいる。その一方で、そうでない先生に出会ってしまった子どもたちがいる。出会いは素晴らしいものだが、ときに残酷である。子どもたちの成長に大きな違いが出てしまう。

教員という仕事は、人を相手にする。それも、可能性に満ちた、これからの世の中を支えていく大切な大切な人材である。教員という職業は、素敵な仕事である。だからこそ、教員である前に、一人の人間としてどうあるべきか、どう生きるべきか。常に自分自身に問うていたいものである。そうすることが、素晴らしい人生を送ることにつながるのではなかろうか。